



横井裕子さん ～CELTA 取得への道～

まだまだ続く CELTA 取得者インタビュー！今回は、日本の大学を卒業後、ニューヨークへ渡り大学院へ通っている横井さんにインタビューをさせていただきました。

最近では、現役の先生方だけでなく学生のうちから CELTA を取得する人の噂を耳にすることが増えてきました。日本でも広がりつつある CELTA について、熱く語っていただきました！



今回インタビューに答えてくれた横井さん。バイタリティのある素敵な方です。

ケンブリッジ大学出版（以下ケンブリッジ）：今日はどうぞ宜しくお願いします！まずは読者の皆様へ自己紹介をお願いします。

横井さん：横井裕子と申します。世界の対立や不平等などを解決し、平和を実現する手段としての教育に興味を持って、今ニューヨークの NYU で大学院生として国際教育を学んでいます。

ケンブリッジ：CELTA を受けようと思ったきっかけを教えてください。

横井さん：大学生の時にインターンをしていた際に、なかなか英語の成績が伸びない学生に出会い、私自身幼少期をアメリカで過ごしたこともあって全くのゼロから英語を学ぶという経験がなかったため、英語の先生としての指導力をもっと身に付けていきたいと思ったのが理由の一つです。

また、今後のキャリアでも一度教員をしたいと思っているので、そこで役に立つと思い CELTA を取ることにしました。



ケンブリッジ: クラスメイトやクラスの雰囲気はどうでしたか？

横井さん: ロンドンで4週間コースに参加して取得したのですが、多様性のあるクラスでした。全部で14人いて、年齢層も20代前半から40代までいました。赤ちゃんがいるお母さんや大学を出たばかりの方、大学で言語学を教えている人や家具デザイナーなど、バックグラウンドも国籍もバラバラでしたが、とても和気あいあいとしていました。アメリカ、イギリス、ドイツ、オランダ、香港、ブラジル、イラン、リトアニア、日本などから来ていました。4週間朝から晩まで毎日一緒にいるので、すごく仲良くなりました。



生徒を前にして授業をするのですが、後ろに立っているクラスメイトがジェスチャーで励ましてくれたり、教室のセッティングを手伝ってくれたり、みんなで助け合う雰囲気でした。

ケンブリッジ: 実際にイギリスで CELTA を受けた感想を教えてください。

横井さん: 大変なことはすごく大変だったのですが、CELTA の考え方として「生徒第一」であることはとても良いと思いました。言語を学ぶことはすごくチャレンジングで大変であることを前提に、生徒の安全安心な学ぶ環境を作ることが私たちの役割であるということを感じました。



例えば一番最初に言われたのは自分が説明をした後に「Do you understand? (分かった?)」って聞いちゃいけないということでした。わかってなくてもわかっていないと言うのが恥ずかしくて「分かった」って生徒は言うってしまうし、大多数の生徒の前でわからないと言うことは生徒の自尊心を傷つけかねないということを教わりました。

また、スピーキングが得意じゃない生徒のためには、ペアワークの際に音楽をかけて生徒のプライバシーを守ることも教わりました。シーンとした部屋では周りに聞かれてしまって生徒のプレッシャーになるため、生徒の心理的な衝撃を和らげ、嫌と思わせないコツを教えてもらいました。

マイナスな部分を上げるなら、4週間しかないのだから知れることには限界があることです。例えば、学習障害や勉強が不得意な子へのサポートまでは踏み込んでくれるわけではないので、その点では限界があると感じました。



ケンブリッジ：ご自身も日本で教育を受け、その後 CELTA の授業を受けて、CELTA は日本の英語教育に役に立つと思いますか？

横井さん：思います。日本だと文脈が無いと言うか、自分自身が使う環境が想像しづらい中で英文を教わることが多いです。例えば、授業では突然教科書を開いて「My name is Aki. Call me Aki.」という表現を練習すると思うのですが、実際生徒の目線からするとそれを使う状況も含め、「自分のこと」として見づらいんですね。

そうじゃなくて、CELTA では自己紹介をするのであればまずは「英語を使って新しいところへ行くとしたらどこへ行きたい？」ということを書いて想像を膨らませて、「じゃあそこで人に会って自己紹介するとしたらなんて言おうかな」と実際に自分が使う文脈をきちんと設定させてから、表現練習してもらったことが大切だと教わります。



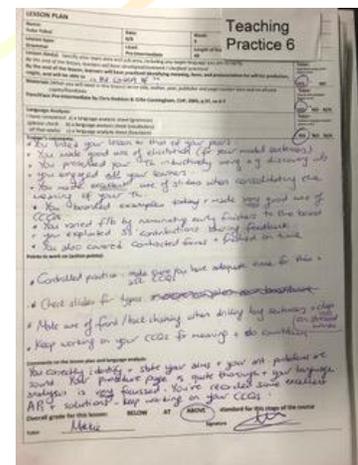
また、CELTA で学んだ生徒中心に考える点も、もっと日本に取り入れられたらいいなと思います。日本では先生が一方向で情報を伝達する、生徒は何も考えずに授業を終えられるという環境になっていることが多いですが、CELTA は生徒が頭を使って考えることが学びにつながると教わります。

授業後よくトレーナーに言われたのが、「あなたが英語をうまくしゃべれるようになるための授業じゃない。授業は生徒が練習して生徒が頭を使う時間。」ということでした。先生は授業準備にとってもたくさん時間を使うけど、授業ではあまり話すことに時間を使わず、生徒が話す時間多くを作るということを CELTA はすごく大切にしているので、そうすれば生徒がもっと積極的に頭を使って授業に参加できるのではないかと思います。

ケンブリッジ：CELTA に合格するために特に苦労したことはありますか？

横井さん：精神的にやっぱり大変かなと思いました。特に授業の準備が大変で…学校の先生方皆さん感じていることだと思うのですが、授業準備はやれることがたくさんあって、終わりが無いのが大変でした。

毎回授業準備後にトレーナーからの評価があるのですが、せっかくやるからにはきちんといい評価を取りたいという願望もあったので、余計に大変でした。





ケンブリッジ : CELTA を英語教師や、英語教師を目指している学生におすすめしますか？

横井さん : おすすめします。新しい視点が得られるからです。生徒に合わせることに、生徒の気持ち、生徒がどれだけ学べるか、生徒が安心して学べる環境のことを気にしている先生はいっぱいいると思うのですが、それを実際にスキルとして学ぶ機会は少ないですし、CELTA ではそれを細かいテクニックとして学ぶので、すごく役に立つのではないかと思います。



CELTA のクラスメイトや CELTA 取得者の Alumni、トレーナーも含め、世界で英語教育に関わる人とのネットワークを手に入れられるのも、すごく役に立つことだと思います。私が通っていた学校では月 1 で英語教育に関する有名な研究者や著者などを呼んで勉強会をしてネットワーキングの機会もありましたし、その他に自分のティーチングに関する疑問や、こういったシチュエーションではどうアプローチしたらいいのだろう…と思った時に、その場でトレーナーにアドバイスを求めることが出来たりもしますし、CELTA で得るネットワークは Professional development の観点からもすごく役に立つと思います。

本日は貴重なインタビューをありがとうございました！